

KANEKA

平成22年3月期

第1四半期

決算概要

株式会社 カネカ

1. 業績概要 (平成22年3月期 第1四半期決算短信 P. 1参照)

(単位：億円)

	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	前年比	
			増減額	伸び率
売上高	1,245	992	△252	△20.3%
営業利益	53	43	△10	△19.4%
経常利益	62	43	△18	△30.0%
純利益	40	27	△13	△33.6%

- ◎ 売上高は前年同期に対して△252億円・△20.3%の減収となりました。
- ◎ 利益は前年同期に対して営業利益で△10億円・△19.4%、経常利益で△18億円・△30.0%、純利益で△13億円・△33.6%の、それぞれ減益となりました。
- ◎ ただし平成21年3月期第4四半期連結会計期間（平成21年1-3月）と比較すると、増収増益と業績は改善しております。

2. 事業セグメント別売上高・営業利益の状況

(平成22年3月期 第1四半期決算短信 P. 11参照)

(単位：億円)

	売上高			営業利益		
	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	増減額	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	増減額
化成品	261	193	△68	14	5	△9
機能性樹脂	209	147	△62	16	16	+0
発泡樹脂製品	183	127	△56	△3	8	+12
食品	310	300	△11	7	22	+15
ライフサイエンス	100	89	△11	15	10	△5
エレクトロニクス	112	86	△26	9	△10	△19
合成繊維、その他	69	51	△18	11	5	△6
消去・全社費用	—	—	—	△16	△14	+2
計	1,245	992	△252	53	43	△10

- ◎ 売上高は全セグメントで減収となりました。営業利益では機能性樹脂、発泡樹脂製品、食品の3セグメントが増益となりましたが、それ以外の4セグメントは減益となりました。
- ◎ 為替は対ドル、ユーロとも円高となり、前年同期に対して売上高で△41億円、営業利益で△14億円の影響がありました。

◎ 当期の事業セグメント別の状況は以下の通りです。

・ 化成品事業

塩化ビニール樹脂は、中国をはじめとする海外市場の需要が回復してまいりましたが、国内需要の低迷が続き、販売数量、販売価格共に低下し減収減益となりました。塩ビ系特殊樹脂は、国内需要低迷の影響が大きいものの、コストダウン等による収益改善を図り減収増益となりました。か性ソーダは、国内需要が低調に推移しました。セグメント全体では減収減益となりましたが、平成21年3月期第4四半期連結会計期間（平成21年1-3月）との対比では、黒字に復帰いたしました。

・ 機能性樹脂事業

モディファイヤーは、アジア市場の需要は回復してきたものの、欧米市場の回復ペースは鈍く、日本市場は低迷を続け、減収となりましたが、コストダウン等による収益体質強化策を推し進め増益となりました。変成シリコンポリマーは日米欧での建築関連需要の不振により、減収減益となりました。セグメント全体では減収増益となり、平成21年3月期第4四半期連結会計期間（平成21年1-3月）との対比では、黒字に復帰いたしました。

・ 発泡樹脂製品事業

国内市場の低迷の影響を受け、発泡スチレン樹脂・成型品、押出發泡ポリスチレンボード、ビーズ法発泡ポリオレフィン共に販売数量を落としましたが、徹底した製造コストダウンや経費削減に取り組み、当セグメントは減収ながら増益となりました。

・ 食品事業

消費者の節約・低価格志向の影響を受けて需要が伸び悩む中、競争激化により販売数量・販売価格共に下落しましたが、コストダウンや新製品の拡販による収益性向上に取り組んだ結果、当セグメントは減収増益となりました。

・ ライフサイエンス事業

医療機器はインターベンション事業の販売が順調に推移し、増収増益となりました。医薬バルク・中間体は、販売数量が前年同期を下回り、減収減益となりました。機能性食品素材は、既存製品の販売減を高機能品の増販でカバーしきれず、減収減益となりました。セグメント全体では減収減益となりました。

・ エレクトロニクス事業

超耐熱性ポリイミドフィルムの販売は、回復基調にあるものの前年同期を上回るまでには至らず、減収減益となりました。太陽電池は、欧州での需要が景気低迷の影響により落ち込んだことに加え、競争の激化から販売価格が低下し、減収減益となりました。セグメント全体では減収減益で採算割れとなりました。

・ 合成繊維、その他事業

合成繊維は、世界的な景気低迷の影響を受け、海外需要が減少したことに円高の影響が加わり、減収減益となりました。セグメント全体でも減収減益となりました。

3. 単独／連結子会社別売上高・営業利益の状況

(単位：億円)

	売上高			営業利益		
	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	増減額	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	増減額
単独	770	595	△174	36	17	△19
国内子会社	642	581	△60	10	20	+10
海外子会社	262	166	△95	12	12	+0

- ◎ 国内子会社では、医薬バルク・中間体関連の大阪合成有機化学などが低調なほかは、全般的に損益が改善しました。
- ◎ 海外子会社では、コストダウンの進展などからカネカテキサス、カネカマレーシアが減収ながら増益となり採算化。カネカニューヨークホールディングも赤字ながら損益が改善しました。カネカベルギーは減収減益となりました。

4. 海外売上高の状況

(平成22年3月期 第1四半期決算短信 P. 12参照)

(単位：億円)

	前期 (4-6月)	当期 (4-6月)	増減額	伸び率
アジア	187	152	△35	△18.9%
北米	90	58	△33	△36.1%
欧州	147	84	△63	△42.9%
その他	45	33	△12	△26.7%
海外売上高計 (海外売上高比率)	469 (37.7%)	326 (32.9%)	△143	△30.4%

- ◎ 世界同時不況の影響が広範に及び、輸出、海外子会社の売上高ともに減少。全地域で減収となりました。海外売上高は前年に対して143億円減少、海外売上高比率も前年同期37.7%に対して32.9%と低下しました。

5. 業績予想 (平成22年3月期 第1四半期決算短信 P. 1・5参照)

(単位：億円)

	前回発表予想		今回修正予想		対前回予想 (4-9月)	
	(4-9月)	通期	(4-9月)	通期	増減額	増減率
売上高	1,900	4,100	2,000	4,100	+100	+5.3%
営業利益	40	130	65	130	+25	+62.5%
経常利益	35	110	60	110	+25	+71.4%
純利益	20	60	33	60	+13	+65.0%

- ◎ 当社グループの各事業は、依然国内や欧米市況低迷の影響を強く受けておりますが、製造コストや経費の削減等の収益力回復策の効果が表れてきておりますほか、中国をはじめとするアジア市況が回復傾向にあること等により、第2四半期連結累計期間の業績予想は、前回予想を上回る見込みとなりました。なお、通期の連結業績予想につきましては、現時点において変更はありません。
- ◎ 平成22年3月期第2四半期連結会計期間(平成21年7-9月)の為替レート、原料価格につきましては、90円/US\$、125円/EURO、国産ナフサ価格40,000円/KLと想定しております。

以 上